臨済録ノート（続）

――中国臨済禅創草時代に関する文献資料の綜合整理の覚書（その五）――

柳田聖山

本稿の前半を『禅学研究』第五十二号に掲げてから、すでに六年を経過した。本来ならば、此処に発表する後半は、その後の研究によるかなりの補訂を加えたいのであるが、そのためには前半を大きく改める必要があり、目下の身辺の事情はそれを許さぬ。今は最少限度の訂正にとどめて、とにもかくにも、私の『臨済録』の書誌に関する覚え書きを、ここで一往完結することにする。（昭和四十二年二月二十日）

一〇

円覚宗演の重開臨済録は、現行本の最古の祖本で、この書には、周知の様に、巻首に馬防の序文が添えられている。

この序は、様式・内容ともに非常に立派なもので、四字対句の偈文によって、本録中の主な話と説法を要約して記して居り、中国及び日本に於ける後代の臨済録は、必ずこの序を具するのが一般となっている。

延康殿学士金紫光禄大夫真定府路安撫使兼馬歩軍都総管兼知成徳軍府事という、すばらしく長い官名をもつ馬防について、この人の伝記が知られぬのは残念であるが、円覚宗演は、補続高僧伝の伝える所によると、当時に於ける第一流の名僧で、徽宗の勅によってしきりに入内説法しているから、右の如き肩書をもつ馬防とは、恐らく両人が汴京の徽宗の下で出合った時にこの序が書かれ、晩年宗演が福州の鼓山に帰老した後に、本書の開版を見たのであろう。

宗演は雲門宗に属したから、この書と前後して雲門広

録三巻をも校勘出版して居り、同書の巻尾には、

住福州皷山円覚宗演校勘、板在福州皷山王溢刊

と記されている。

当時の福州は、仏教書の出版事業が極めて盛んで、熈寧（1068—1077）末から崇寧（1102—1106）に至る約四十年の間に、東漸寺版大蔵経の完成を見、次で、大観（1107—1110）末年より、再び開元寺版大蔵経の彫造が始められて居り、この間に、別に、六祖壇経、禅源諸詮集都序、雪峯語録、玄沙語録、皷山語録等を始め、伝灯玉英集や祖庭事苑等が続々出版されているから、臨済録がこの地で重開されたのも決して偶然ではない。

宗演の重開臨済録は、周知の様に、始めに馬防の序につづいて、上堂、示衆を含む本書の主部があり、次で、勘弁、行録の三つの部分から成り立っているが、この様な編集構成の様式は、彼の雲門広録に類似しているから恐らく宗演の編集によるのであろう。

彼は自らの政治的な地位に拠って、臨済・雲門の語録を同一様式により編集出版することによって、当時、次第に盛大に趣きつつあった臨済派の人々の活躍に、古典的な根拠を提供しようとしたのであろう。事実、宗演の重開本は、彼の時代、及びそれに続く臨済派の人々の華々しい活躍とともに、一世に喧伝された様で、仏照徳光（1121—1203）の入内奏対録に、馬防の序が引かれたり、臨済大悟の機縁が提唱されたり、大慧宗杲（1089—1163）が侍郎張九成と臨済四料簡の問答を交わしたりしているのは、いずれも宗演の重開臨済録の出版が機縁になっているのであろうと思われる。

又、これに先立って、建炎三年（1129）に、円悟克勤（1063—1135）が、弟子大慧のために、「臨済正宗記」を与えて、臨済禅の綱要を叙べ、後事を嘱しているのも、恐らく本書の出版が機縁となって、政府に出入する高位の顕紳や士大夫の間に、臨済禅への関心が異常に高まり、所謂、禅宗五家の雄として、天下に公認されるに至っていたためであろう。

処で、福州の皷山では、右の様な異常な禅ブームと禅録の盛行に応ずるかの様に、紹興初年（1131—）、僧挺守賾なる人が、最初の禅録選集とも言うべき古尊宿語要四巻を編集出版し、南泉、投子、睦州、趙州以下すべて二十家（二十二家ともいう）の語録を収めているが、この最初の禅宗叢書に、臨済、雲門の二家が入録されなかったのは、前に出版された宗演の本が、当時すでに一般に流布していて、改めてこれを収録する必要がなかったためであろう。

処が、降って、南宋の嘉熙二年（1238）になると、同じ

く皷山の晦室師明が、先の守賾の四巻本の古尊宿語要に収められたもの以外の禅録八十家を選んで、続開古尊宿語要六巻を編集出版したが、この時、その第一巻天集に宗演重開の臨済録を収めたのが、語録総集に本書が収録された最初であり、而もこの時の印本は、我が東京の大東急記念文庫に保存されて居り、この本は、我々が現在手にし得る最古の臨済録である。（川瀬一馬編―大東急記念文庫貴重書解題、仏書の部―一九七頁。）

然るに、先の古尊宿語要四巻は、その後更に咸淳三年(1267)に至って、物初大観によって改編増補重刊されて四十八巻となり、このときに続開古尊宿語要その他からおよそ三十五家の語録がとり入れられ、臨済録と雲門録も更めて入録されたが、このときの臨済録は、どうしたわけか、前の続開古尊宿語要第一巻のもの、つまり宗演の重開本とは違ったテキストに拠ったので、ここに、続開古尊宿語要第一巻と、再編古尊宿語録第四、五巻の両叢書に、夫夫異ったテキストの臨済録が見られることとなるのである。

右の再編古尊宿語録所収の臨済録が、どんな経過をとって伝えられたテキストであるか、今日明かにし得ないが、最初の馬防の序がないことは勿論、前に叙べた様に宗演本で行録の最後に位する略伝の一段が、「臨済慧照禅師塔記」の題下に、本文と切り離されて、興化存奨禅師語録の巻尾に移され、

住大名府興化嗣法小師存奨校勘

という宗演本にはなかった一行が附加されている。

又、この古宿本と宗演本とを比較すると、行録の後半に、四照用や両僧一喝の如き相当大きい増広や重複がみられる。

続蔵経第二編第二十五套第五冊の目録に附せられている編集者の註記によると、古尊宿語録本臨済録は、四家録本臨済録と同一であると言って居り、この註記を一見すると、恰かも、先に叙べた天聖広灯録の底本となった四家録本に本づくかの如くであるが、古い四家録は、一たび宋代に失われ、現存のものは明末の再編本であるから、続蔵経編集者の註記を、文字通りに信ずるわけにはいかない。

先に述べたように、宗演の重開本に加えられた馬防の序は、本録中の機縁を簡潔に羅列したもので、恰も臨済録の内容目次の観があるが、有名な四照用の一段のみは馬防の序にあって本録に此を欠いている。馬防の序に見える以上、当時のテキストには存した筈だという推論も一往は成り立つけれども、宗演の本の忠実な覆印である続開古尊宿語要に、やはり四照用の一段がないことから

言えば、もともと宗演の本には此の一段がなかったのであり、寧ろ馬防は此を他の資料によって加えたものと考えなければならぬ。然らば、馬防が拠った他の資料とは何か。

元来、四照用の一段は、天聖広灯録が拠った古い臨済録には存しなかったようで、天聖広灯録には、臨済の章以外の諸弟子の章にも、此に関する説を見出すことが出来ない。寧ろ、四照用に関する説法の初見は、前記の古尊宿語要（二集）に収められる「汝州首山念和尚語録」に、師、四種照用の語を出す、として、

問、如何是先照後用。師云、南岳嶺頭雲、太行山下賊。問、如何是先用後照。師云、太行山下賊、南岳嶺頭雲。問、如何是照用同時。師云、収下南岳嶺頭雲、捉得太行山下賊。問、如何是照用不同時。師云、昨日有雨今日晴。

と言っているが、南岳嶺頭雲云云の句は、天聖広灯録の南院慧顒の章に、

問、如何是南宗北祖。師云、大庾嶺頭雲、太行山下賊。学云、如何明会。師云、幽燕平劫殺、呉越笑呵呵。学云、畢竟又如何。師云、莫言無法用、最苦是新夢。（続蔵経のテキストは、誤植のために読めないが、しばらくもとのままに掲げる。）

とあるによることは明かであり、天聖広灯録より以後、古尊宿語要の出現までの間に、此が首山の問答とされたのである。又、四照用の問答そのものは、石霜楚円（986—1039）の「潭州道吾山語録」に、

上堂、……座主問、承教有言、因縁自然。自然即不問。如何是因縁。師云、記来多少時。進云、如何是自然。師云、速退速退、妨他別人問。座主擬議。師便打。師乃云、有時先照後用、有時先用後照、有時照用同時、有時照用不同時。所以道、有明有暗、有起有倒。喝一喝云、且道是照是用。還有人緇素得麽。若有、試請出来呈醜拙看。若無、道吾今日失利。下座。

と見え、少くとも石霜楚円の時には、四照用の説が存したことは確実である。然し、四照用を以て明かに臨済の説とするのは、恐らく人天眼目が最初であり、右の石霜の垂示をも幷せ掲げている。従って、馬防はこのような宋代に於ける臨済禅の伝承に本づいて、彼の序を加えたのであり、四照用を含んだ臨済録が存したとは考えられない。

又、四照用と並んで、同じく臨済の説に帰せられる四賓主についても、その始めは恐らく風穴延沼からであり しかもその内容は、賓中賓、賓中主、主中賓、主中主についての問答であり、臨済録に見える主客相見の四種の分類とは異っている。主中主や賓中主の問答は、寧ろ歴

史的には洞山良价のものであり、祖堂集の隠山の章などに見えるのが最も確実である。尤も、四賓主の問答を、風穴や首山以下の、此の系統の人々が好んで挙揚したことは確かであり、同じく、首山に嗣いだ石門慈照（965―1032）の「鳳巌集」などに、四照用の頌を掲げたのち、

一喝分賓主、照用一時行。会得箇中意、日午打三更。

と総頌して居り、四賓主と四照用を互に関係あるものとして居り、後になると、右の「一喝分賓主云云」の句が臨済その人のものとされる例もあるようである。元来、臨済の家風を以て、主賓に関係せしめたのは、法眼文益（885―958）の「宗門十規論」で、

且如曹洞家風、則有偏有正、有明有暗。臨済有主有賓有体有用。

と言って居り、曹洞の偏正に対するものと見られていたようである。「人天眼目」に臨済の三玄三要の説を挙げて、

師云、大凡演唱宗乗、一語須具三玄門、一玄門須具三要。有権有実、有照有用。汝等諸人作麼生会。

と言って、「臨済録」には見られぬ有照有用の一句を加えているのも、明かに此と関係がある。

いったい、臨済の賓主の句というのは、本録の上堂の段に、

上堂、有僧出礼拝。師便喝。僧云、老和尚莫探頭好。師云、你道落在什麼処。僧便喝。又有僧問、如何是仏法大意。師便喝。僧礼拝。師云、你道好喝也無。僧云、草賊大敗。師云、過在什麼処。僧云、再犯不容。師便喝。

是日、両堂首座相見、同時下喝。僧問師、還有賓主也無。師云、賓主歴然。師云、大衆、要会臨済賓主句、問取堂中二首座。便下座。

とあるのを指すが、天聖広燈録の臨済の章では、後半の

是日両堂首座以下の一段なく、再犯不容の句につづいて、

師云、大衆、要会臨済賓主句、問取堂中二禅客。便下座。

とあり、前後の関係が簡明である。又、此の一段は、「汝州南院顒和尚語要」によると、

問、如何是仏法大意。師便喝。僧云、老和尚、莫探頭好。師又喝。僧便礼拝。師云、放過即不可。便打。

問、如何是仏法大意。師便喝。僧便礼拝。

師云、今夜両箇、俱是作家禅客。与宝応老称提臨済正法眼蔵。若要一喝下弁賓主、問取二禅客。

とあり、更に「汝州首山念和尚語録」には、

今時兄弟、只管横喝竪喝、及至窮著、並無言説。看他臨済会下、有僧出来礼拝。臨済便喝。僧云、老漢莫探

頭好。済云、汝道落在什麼処。僧便喝。又有僧問、如何是仏法大意。済便喝。僧礼拝。済乃召衆云、你道適来這一喝、好喝也無。僧云、草賊大敗。済云、過在什麼処。僧云、再犯不容。済云、要識臨済賓主話、問取堂中二禅客。師云、諸兄弟、学般若菩薩、直須諦当去始得。雖然如是、暁者還稀。珍重。

とあって、臨済の賓主の句なるものが、必ずしも人天眼目に言う如き、四種の主客相見の説と関係するものでなかったことを知るのであり、まして四照用の説と関係せしめられるのは、右に挙げた石門慈照の頃以後なるを推することが出来る。

いずれにしても、四照用、四賓主などの説が、臨済の喝に関するものとされ、彼の正法眼蔵の重要なる本質と見られるのは、宋初以来のことであり、臨済義玄その人の説法から言えば、すべて後代の発展に外ならず、宋代に盛えた五家の随一としての臨済禅の立場から、故らに主張されたものであり、臨済録そのものもまた宋代の臨済禅の立場からするかなりの影響を受けていることは争えない。特に、人天眼目に収められる五家の宗風の如きは、すべてそうした宋代の説の集録であり、右に挙げた喝と賓主の一段が、後に重刻古尊宿語録に収める「臨済録」や「五燈会元」に至って、更に異って伝えられているのは、人天眼目以後に於ける新しい発展に外ならぬ。

更に一言するならば、溯って天聖広燈録の臨済の章に始めて現われる三聖慧然への正法眼蔵の付嘱に関する一段の如き、宋版の景徳伝燈録では、伝法偈の付嘱のみであり、付嘱の相手が必ずしも明確でないのは、かえって其が史実に近いものである証拠であろう。三聖との問答の新加は、宋初に至って臨済禅の伝統が形成されたとき臨済録の編者としての三聖の権威を主張するための作意であり、此の時なお興化存奬の地位が確立していないのも、右の推定を助けるであろう。すでに述べたように、興化付嘱の権威は、宗演重開の所謂「塔記」によって始めて現われるのである。元来、入寂時に於ける伝法偈の伝授は、中唐に出現した宝林伝以来のことであり、臨済の示衆に宝林伝の影響がかなり強いことから言えば、彼が入寂に際して伝法偈を誦したことは自然であり、同じく宝林伝に見える正法眼蔵の相伝を、喝の挙揚によって主張しようとするのと同一次元の談ではない。

臨済録の流伝は、宋代以後に於ける臨済禅の異常な発展と切り離して考えることは出来ない。後代に発展した宗旨の立場から、種々の改訂や増補が加えられているからである。現在の臨済録（宗演重開のもの）を以て、直ちに唐末の臨済その人の言行録と見ることは出来ぬので

あり、まして後に現われる重刻古尊宿語録によって、これを改めることは、歴史的には無意味である。この点、一たん宋代にその流伝を断ったのち、明代に再編された洞山録や龐居士語録の方が、新しい編集であるが故に、その資料を古い伝燈録その他に承けているために、その由来を考証できる限りに於て、大いに信用できるのと極めて対蹠的である。

一一

次に、元代に帝都北京で再刊された本録について述べねばならぬ。宋代の禅宗は主として江南に盛え、北地一帯は地理的、政治的に南地と切り離されて、遼や金の統治下に入ったから、この地の禅、若しくは仏教に関する資料の今日に伝えられるものは極めて少い。従って、河北臨済院のその後の変遷や、この地方に残った臨済系統の人々の歴史的事情などについて知られるものは全くないと言ってよいが、元代になると、元朝の包容的な仏教政策とともに、この地に伝わった系統の臨済派禅宗の人々の中に、にわかにすぐれたものが輩出し、臨済院の復興、河北臨済禅の法系の宣揚、臨済録の覆刊等の事業が相次いで行われることとなった。

この運動の先きがけとなった人は、海雲印簡（1202—1257）である。この人は、楊岐下十世で、蒙古の第二主太宗窩闊台、第三主定宗貴由（1242—1250 在位）、第四主憲宗蒙哥（1251—1259在位）のとき、列朝の帰依をうけて入内し、当時未だ幼少であった世祖忽必烈のために心要を説いたという。そして、帝室の保護の下に、彼が河北臨済院に住し、大いに殿宇を興して、十方禅院としたのは、すでに定宗の元年（1246）頃であったらしいが、以後、彼は臨済禅の再興につとめて、門下に多くのすぐれた人物を打出した。就中、可庵朗の門に出た劉秉忠(1216—1274) と、頤庵偃の下に出た西雲安大師が最も著われ、前者は世祖（1260—1294）朝の宰相として活躍し、後者は晩年元貞元年（1295）、成宗（1295—1307）の帰依によって、天都の官寺である大慶寿寺に住して、栄禄大夫大司空の位と、臨済正宗の玉印を賜わって、臨済一宗の事を領せしめられたが、降って至大二年（1309）、武宗が内翰趙孟頫（1254—1322）をして、「臨済正宗之碑」を撰せしめ、臨済禅の歴史的淵源とその精神を内外に宣揚したことは、元朝の仏教史を劃する大事件であった。

一方、又これに先立って、同じく臨済の流れを承け、汾陽善昭下十三世に当る雪堂普仁があり、世祖、成宗の帰依によって、江淮福建等釈教総統に任ぜられ、至元二十四年（1287）、聖上の御香を賞して五台山と大同に詣り、

- 臨済義玄
  - 興化存奨
    - 南院慧顒
      - 風穴延沼
        - 首山省念
          - 汾陽善昭
            - 瑯琊慧覚
              - 泐潭月
                - 昆陵真
                - 白水白
                - 天寧党
                - 慈照純
                - ⓒ
            - 慈明楚円
              - 楊岐方会
                - 白雲守端
                - 五祖法演
                - 天目斉
                - 懶牛和（汝州）
                - ⓑ
                - 円悟克勤
                - 大慧宗杲
                - 虎丘紹隆
                - ⓐ

- ⓐ
  - 応庵華
    - 密庵傑
      - 破庵先
      - 石田薫
      - 愚極慧（浄慈）
      - 松源岳
      - 無得通
      - 虚舟度
      - 径山伏（虎巌浄伏）

- ⓑ
  - 竹林宝
    - 竹林庵
      - 容庵海（竹林西堂）
        - 帰雲宣
          - 平山亮
            - 竜宮玉
              - 大名海（華庵）
        - 中和璋（慶寿）
          - 竹林彝
          - 海雲印簡（冲虚）
            - 庵主通
              - 慶寿満（文貞）
            - 可庵朗
              - 劉秉忠
            - 頤庵偃
              - 慶寿安（西雲大宗師）
            - 慵庵堅
        - 白潤一
          - 虚中昉
          - 懶牧帰

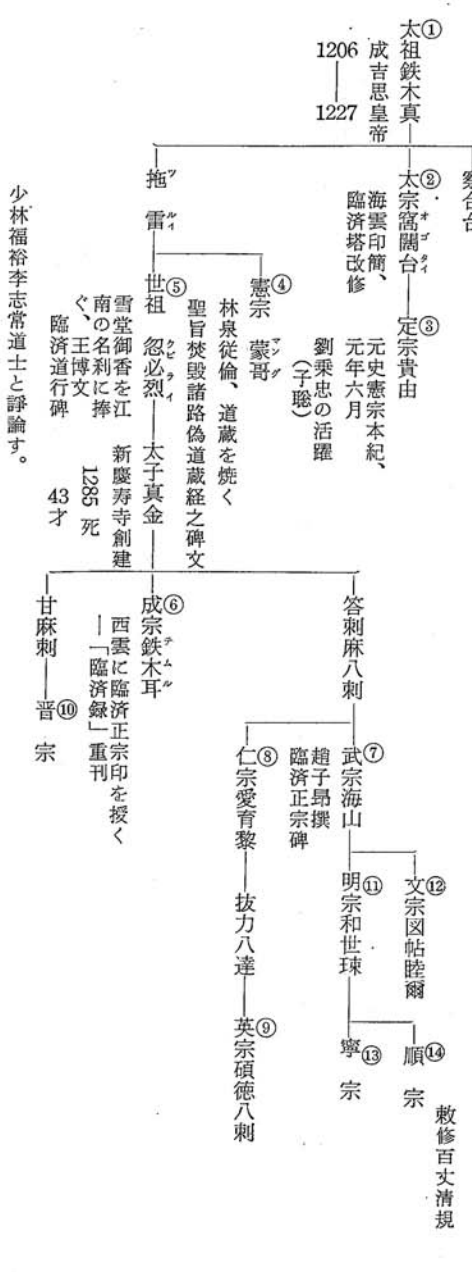
- ⓒ
  - 鄭州宝
    - 竹林蔵
    - 慶寿亨
      - 太原昭
      - 東平汴
    - 少林鑒
      - 法王通
        - 安聞覚
          - 南京智
            - 寿峯湛
              - 五峯普秀
          - 西菴贇
            - 雪堂普仁
              - [illegible]
              - 大夫同修国史賈汝舟
          - 雙泉泰公

次で杭浙の名刹を巡礼し、梵修祝釐したが、当時の江南地方に於ける臨済下の児孫たち――愚極至慧、玉山徳珍虎巌浄伏等とはかって、僧統満公（可庵朗の弟子、華庵満、天都大慶寿寺に住す）とともに、正議大夫御史中丞行御史台事、王博文をして、

「真定十方臨済慧照玄公大宗師道行碑」

を撰せしめて、臨済院に立石し、宗祖臨済義玄の遺徳を顕彰すると共に、更に、当時成宗の信任厚かった曹洞下の林泉従倫等と、臨済録の重刊を計劃したのである。

ところで、蒙古の第五帝世祖が、至元八年（1271）国号を元と改め、天下の釈氏を京師に集めたとき、曹洞下少林雪庭福裕（1203―1275）の門下が、その三分の一を占めた。又、至元十二年、世祖が広寒殿に御し、禅教の要義を問うたが、帝師及び諸者徳みな禅源詮を以て対えた



少林福裕李志常道士と評論す。

ので、上は意悦し板行を命じ、二十有九年にして、成宗の大徳七年（1303）、遂に出版をみた。恰もこれに前後する雪堂の重刊臨済録は、「臨済慧照玄公大宗師語録」と呼ばれ、三序がある。

先ず、元貞二年（1296）林泉従倫が序し、次で、大徳二年（1298）郭天錫（—1343）が序し、更に五峯普秀が序を加えているが、この序は年時が明かでない。普秀は自ら序中に「雪堂禅師乃吾三世祖、嘱予為序、率爾書之」と言っているから、雪堂普仁の孫弟子に当る人で、実際の出版がなされたのは大徳年中（1297—1307）のことであろう。

この本は、従倫の序に、

河北江南遍尋是録、偶至余杭得獲是本、如貧得宝、似暗得燈、踊躍歓呼、不勝感激、遂捨長財、繡梓流通、俵施諸刹。

とあるが、宗演重開のものと比較すると、馬防の序が無い外は、本文に殆んど異同なく、上堂示衆、勘弁、行録の編集様式も同一で、恐らく、宗演本を重刊したのであろう。但し、当時、すでに天下に尋ねて、臨済録の刊本を得難かったらしいことは注目すべきである。

なお、雪堂普仁は、今日伝記の明かでない人であるがこの当時、禅源諸詮集都序や碧巌集等も刊行していた様で、前者の重刻の序に、

昔至元十二年春正月、世祖皇帝万機之暇、御瓊華島、延請帝師、太保文貞劉公亦在焉、乃召在京耆宿、問諸禅教乖互之義、先師西庵贇公等八人、因以圭峯禅源詮文為対、允愜宸衷、当時先師嘱其弟雙泉泰公為之記、仍命雪堂鏤板流行。

といい、後者は、延祐四年（1317）に、虚谷希陵が附した後序に、

嵋中張明遠偶獲写本後冊、又獲雪堂刊本、及蜀本。

という。

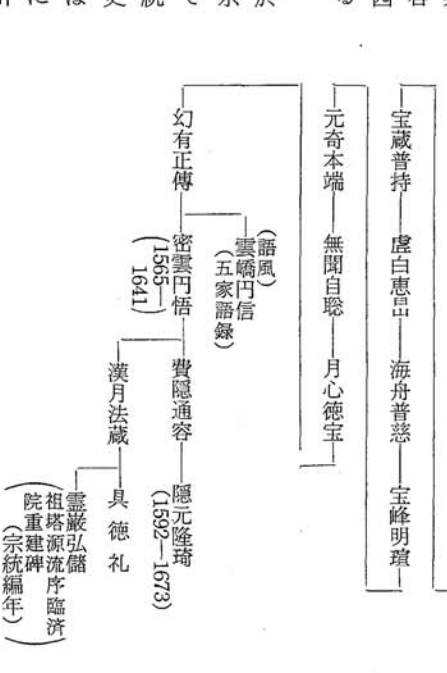
又、金石萃編補正巻四所収の滎陽洞林寺聖旨碑及び、重陽洞林寺蔵経記などに、資料がある。

尚、報恩行秀下五世、嵩山の小室山に住した文才淳拙（1273—1352）の碑銘（菩提達磨嵩山史蹟大観所収）によると、この人は梁の武帝の達磨碑銘を再建し、香厳語録、潙山警策、般若心経等と共に四家語録を再刊したと云うからこの四家録に臨済録が含まれていたことは言うまでもないが、伝本の今日に存するものもなく、この本についての他の資料も存せず、詳しいことを知り得ぬのは残念である。

元代以後の大陸に於ける臨済録の流伝については、殆んど見るべきものはない。しかし元以後と雖も、臨済宗

の盛大な発展と相俟って、本録の重版が幾度か行われたことはいうまでもない。――例えば、明末の万暦十七年(1589)、東安の解君寧、静山居士が四家語録を編して、馬祖、百丈、黄檗、臨済の語録を一括出版し、更に、崇禎初年（1628―）には、郭凝之（海寧の人、字は正中。天啓の挙人で官は兗東兵備副使。著に孝友伝あり。国朝耆献類徴四六五、参照）と、語風円信（1571―1647）との共編になる五家語録が出版されている。

これらの四家語録や五家語録の出版は、実は明末に於ける臨済・曹洞両派の角立、及び臨済派内部に於ける宗統抗争によって、夫々の異る意図を以てなされたものであり、各派に於ける臨済祖塔の復興事業や、各派の宗統を主張する伝燈録の編纂ともからんで居て、それらの史実の客観的な究明なくして、正当な評価を与えることは出来ない。就中、大陸に於ける臨済正宗の伝統を日本に伸張しようとする隠元隆琦（1592―1673）の活動が、徳川時代の初期に於ける我が国の禅宗諸派に大きい刺激を与え、新しい宗統の自覚を生んだ事実を無視することは出来ないが、今それらの問題について深く立ち入ることは差しひかえよう。ただ、そうした明末清初の宗統の抗争を究明したものに、陳垣氏の「清初僧諍記」があり、吉川幸次郎氏の「居士としての銭牧斎」（福井博士頌寿記念東洋思想論集）も、またこれに関説あることを附記しておく。



一二

臨済録の日本初伝について、今日明確な説はないが、義堂周信（1325―1388）の日記である空華日工集の始めに次の様な話が載せられている。

元弘二年壬申（1332）、時に義堂八才、

一日、於家蔵襍書中、探得臨済録一冊、喜而読之、宛如宿習、父母怪之、以為天授、……師之祖父某、学儒釈之教、専修禅那、嘗謁由良国師、参禅問道、且白曰、願得禅録一巻、以為理性学本、国師乃与臨済録、是其本也。

ここにみえる由良国師は、法燈円明国師心地覚心（1207—1298）で、彼が帰朝したのは、円明国師行実年譜によると、建長六年（1254）であり、恐らくこの時、臨済録を将来したのであろう。又、抜隊和尚（1327—1387）の行状に、禅師が雲州の雲樹寺で、孤峯和尚（1271—1361）に参じたとき、孤峯が衆に臨済語録を看ることをすすめているのを聴いたと言う。孤峯は覚心の法嗣であるから、これによって、彼の系統で本録が重視されていたことを知るのであり、後年の示衆にも、よく臨済録を用いている点が注意される。又、抜隊の和泥合水集という名は、臨済に帰せられる四照用の説に見られる句に本づくものである。

思うに、建長六年は、鼓山の晦室師明が、続開古尊宿語要六巻を開版してから十七年目に当り、元の雪堂本は未だ出版されていないから、後に義堂が読んだものは、馬防の序のある続開古尊宿語要本、つまり、宗演本であった筈である。

尤も、臨済に関する話は、これに先立って道元（1200—1253）の永平知事清規や正法眼蔵その他に引かれているし、又、蘭渓道隆（1213—1278）が、建長寺で臨済録を提唱したとも伝えられるから（白石、禅宗編年史八〇二頁）、或は、法燈国師の帰朝以前に、既に日本に伝来されていたかも知れぬが、明確なことはもとより判らない。

処で、降って元応二年（1320）に、比丘妙秀なる人が、本録を開版し、京都建仁寺の祥雲庵に版木を施入して居るが、これは本邦に於ける臨済録の初刊であり、而もこの本は、今日、東京の静嘉堂文庫に現存する。この本は巻首に馬防の序一紙を有し、全巻三十五紙で、巻尾に次の識語がある。

仏祖正宗、貴久流伝、因茲此録鏤板、捨入祥雲庵、時元応庚申重陽日、小比丘妙秀。

建仁寺祥雲庵は、一山一寧（1247—1317）に嗣いだ無著良縁が創した寺で、妙秀は恐らく一寧、若しくは良縁の徒であろう。

この当時の日本は、新しい武士社会の基礎態勢が漸く固まり、日本の国力の伸展とともに、南宋、若しくは元朝文化の移植全盛期に当り、武士階級の帰依と保護によって、鎌倉及び京都を中心として、南宋以来の祖師禅が急激に盛行し、彼此両国の禅僧の往来もはげしく、中国

唐宋の禅録が続々将来され、これに伴って、日本禅林に於ける覆刻開版が相次ぎ、やがて五山版全盛の時代を迎えることとなる。

例えば、伝心法要（1238）、人天眼目（1303）、禅源諸詮集都序（1305）、虚堂録（1313）、無門関（1315）、冥枢会要（1326）、円悟心要（1328）、碧岩録（1335）、景徳伝燈録（1348）、宗鏡録（1371）等、相当大部なものまで、続々出版されると共に、元亨釈書（1364）、貞和集、大応録（1372）、塩山和泥合水鈔（1386）等の日本人の著作も出されて居り、この間に伍して、臨済録も亦た相次で数回の重開をみることとなった様で、今日知られているものだけでも、嘉暦四年（1329）比丘尼道証が出版したもの（東京国会図書館蔵）、弘和元年（1381）開版のもの、至徳元年（1384）可重が重刊したもの、永享九年（1437）法性寺東経所出版のもの、延徳三年（1491）季恭居士が濃州（岐阜）正法栖雲庵に捨入したもの、文亀元年（1501）開版のものなどがあり、永亨九年本が元代重開の雪堂本を承けて三序を有する以外は、すべて馬防序のある宗演本の系統のものである点は注意すべきである。

降って徳川時代に入ると、一般商工業文化の急激な発展上昇によって、町版（マチバン）が興り、従来のものが殆んどすべて寺院の出版であるのに対して、市井の書店出版のものが相次いで現われた。例えば、元和九年（1623）、寛永四年（1627）、同十年（1633）、同十四年（1637）、慶安元年（1648）、承応元年（1652）、万治二年（1659）、貞享二年（1685）、元禄四年（1691）、同九年（1696）、同十二年（1699）、享保十二年（1727）等、枚挙に暇なき状態である。就中、享保本は、妙心寺竜華院の無著道忠（1653—1745）が、古本の誤謬を訂し、国点を改めて出版したもので、徳川時代を通じて、臨済録の定本として最もすぐれたものである。

この本は、巻尾に、趙孟頫の「臨済正宗碑」、玉博文の「真定十方臨済慧照玄公大宗師道行碑銘」を并せ刻し、更に、訂校者自身の次の様な跋を附している。

此箇一縛、我家青氈。旧刻迭出、盭踈馬焉。祖庭闕典、竊以為悁。精楷新写、黜訛完騫。校讐反復、誠肆入鐫。升平快事、曷用加旃。遂託副墨、謹白参玄。合掌一覧、行脚十年。孤明歴々、透霄徹泉。行業純一、汔可犯辺。過此已往、火中開蓮。具過師眼、掉打爺拳。

葆雨堂主道忠拝識

但州瑠璃山満願禅寺小比丘宗寿拝書

享保丁未初秋

無著校訂の臨済録は、大正七年（1918）円覚寺の釈宗演（1859—1919）によって活版に移され、東京森江書店よ

り出版されて居り、昨年、臨済の一千百年遠忌を記念して、古川大航氏が覆製したのも、右の活版本に鈴木大拙氏が書き込みを加えた一本であり、同じく一千百年忌を記念して、禅文化研究所でも右の無著による校訂本の新訂を計劃し、目下進行中である。

なお、江戸時代に作られた本録の注釈書は、すべて本文を含んでいるが、これらのテキストについては後に説く如くである。

更に又、明治以降になると、活版印刷の発展とともに各種の本が作られ、叢書、大蔵経、国訳訓註本等の本文に含まれるものも極めて多い。今その主なもののみを概観すれば、

明治十七年（1884） 東京 弘教書院
縮刷大蔵経、騰帙四冊、古尊宿語録の内
明治二十一年（1888） 京都 妙心寺花園教黌
附、釈迦如来成道記
明治二十一年（1888） 京都 出雲寺文次郎
五部合刻
明治四十二年（1909） 京都 蔵経書院
卍版続蔵経第二編、二三の二、古尊宿語録の内
明治四十三年（1910） 京都 貝葉書院
禅学宝典の内
明治四十三年（1910） 東京 柳枝軒
岡田乾児、袖珍臨済録仮名付
明治四十四年（1911） 東京 一喝社
禅学大系祖録部一
明治四十四年（1911） 京都 貝葉書院
町元呑空改訂評唱
大正九年（1920） 東京 大阪屋号書店
中原鄧州、提唱臨済録
大正十年（1921） 東京 同書刊行会
国訳禅宗叢書第十一巻
大正十二年（1923） 東京 森江書店
京都 貝葉書院
大正十四年（1925） 東京 真風会
岡田乾児、臨済録贊辯
昭和三年（1928） 東京 同書刊行会
大正新修大蔵経第四十七巻の内
昭和六年（1931） 東京 森江書店
間宮英宗、臨済録夜話
昭和十年（1935） 新興出版社
間宮英宗聖典講話臨済録
昭和十年（1935） 東京 岩波書店
朝比奈宗源校訂、岩波文庫

右の中、大正新修大蔵経第四十七巻所収の臨済録は、永享九年版を底本として、増上寺報恩蔵明版古尊宿語録、宮内省図書寮本、慶安二年本、延徳三年本の四種を校合したもので、今日用いうるテキストとして最良の本である。朝比奈宗源校訂の岩波文庫本は、流布本に見られぬ数節を古尊宿語録によって補った本文を、訳註したもので、ポケット本として便利であるが、訓註には多少問題がある。

（この本は、昨年、新たに口語訳を加えて再版が出された）

更に、戦後に於ける臨済録の研究は、実に長足の進歩をとげ、特に語学的研究に於て見るべきものがある。就中、佐々木ルース夫人の献身による英訳の進行を通してテキストそのものの校訂に新しい成果が見られるが、この仕事には筆者も参加しているので、ここでその評価に立ち入ることはしない。

一三

最後に、日本に於ける臨済録研究の沿革について、其の歴史的変遷を概観し、幷せて古来の注釈書の主なものについて述べておこう。

日本の臨済宗では、古来、何時頃からか明かでないが、臨済録、碧巌録、大慧書、虚堂録、五家正宗賛、江湖風月集、禅儀外文の七部を、宗門七部書（禅林執弊集二十二丈aに見ゆ）として尊重し、その参究講読に力めて来て居る。七部の中、時代によってその研究方法に変遷消長が見られるが、臨済録は、江戸時代初期より中期に他のものよりも特に尊重され、東嶺円慈（1721—1792）の如きは、その五家参詳要路門に、

古来、以本録称録中之王。

と言って居り、この態度は、今日の臨済宗でも変らない様である。

蓋し、江戸時代以前に於ては、主として碧岩録を以て「宗門第一之書」と称して、その参究に力めたが、これは日本中世の禅林で、碧岩の偈頌の美しさを喜んだためで、四六駢儷の綺を競う五山文学の全盛に厭せられて、臨済録は碧岩録ほどには読まれなかった様である。

然し江戸時代に入ると、この傾向は、にわかに逆転し、臨済録への関心が勃興し、多数の注釈書等が作られることとなった。

これは、主としてこの時代に、中国から隠元隆琦（1592—1673）が来朝して中国風の禅を伝え、新しく黄檗山万福寺を開創し、日本禅林に大きい刺激を与えたことによるのであろう。

隠元隆琦の来朝は、承応三年（1654）で、次で、明暦三

年には妙心寺の竜渓性潛（1602—1670）に迎えられて摂州普門寺に入り、先師費隠通容が撰した五燈厳統を出版し、自家の禅が達摩より、六祖、黄檗、臨済、以来の中国祖師禅の正系たるを主張し、寛文二年（1662）には、洛南の宇治の地に、黄檗山万福寺を創建して、開山第一世となり、新しく大陸の臨済正宗を提唱したので、従来、永く五山の文字禅に酔っていた日本禅林も、にわかに覚醒せられて、自から宗祖臨済義元とその語録臨済録への関心を強めるに到ったのである。

尤も、これに先立って、すでに五山禅林に於て、種々の人々が臨済録の研究、講読をしていた事実はある。今日知られているもののみについても、古く夢窓疎石（1275—1351）の孫弟子に当る空谷明応（1328—1407）に、「臨済録直記」（三巻）の著があり、その転写本一部を故陸川堆雲氏が蔵せられているし、「蔭涼軒日録」によると、寛正五年（1464）四月二十二日以後、数ヶ月に亘って、竜崗真圭が足利義政のために臨済録を講じて居り、実隆公記によると、義政は、文明七年（1475）九月十一日、再び大成義庵の臨済録の提唱を聴いている。いうまでもなく、当時は五山の学問の最も盛大な時代で、例えば、有名な雲章一慶（1386—1463）や、桃源瑞仙（1430—1489）等が、敕修百丈清規を始め、史記や易の研究に、高い学問的成果を示しているから、五山禅僧たちの臨済録研究も相当にすぐれた学問的水準に達していたと思われる。

又、記録によると、当時、長享三年（1489）、天文十二年（1543）、永禄十二年（1569）、慶長八年（1603）、慶長十二年（1607）に、夫々何人かが本録を講じて居り、それらの講義ノートが、次の時代の本格的な臨済録註釈の素材となったことが容易に想像される。

次で、江戸時代初期（1603—）に於ける臨済録研究の最もすぐれた業績は、沢庵宗彭（1573—1645）の「臨済録秘抄」と、万安英種（1591—1654）の「臨済録抄」（カナ抄）であって、前者は主として大徳寺の開山大燈国師（1282—1337）以来の大徳寺系の参究記録を集大成したものであり、遂に秘抄とされて刊行を見なかったけれども、後者は、一般に親しみやすい片カナによる註釈で、寛永九年（1632）、村上平楽寺より刊行され、通名「万安抄」の名によって盛んに流行するに至った。万安英種は、曹洞宗に属するが、大慧書を読み、趙州狗子の公案によって大悟した人である。臨済系の人々と交わって、臨済禅への関心の特に強かった人であるが、先述したように、当時は中国大陸に於ても、恰も、四家語録や、五家語録の改編出版が成り、臨済下三十一世密雲円悟（1566—1642）、及びその嗣費隠通容（1593—1661）や、曹洞下の永覚元賢

（1578—1657）、為霖道霈（1615—1702）等の活躍によって、臨済再興の気運がしきりに擡頭していた時期で、そうした大陸禅宗の気運が日本禅林に強く影響したことも見逃してはならない。例えば、為霖道霈が編した「禅海十珍」に臨済の法語が収められているが、これは、景徳伝燈録巻二十八、諸方広語によったものである。

江戸初期の臨済録註釈書としては、以上の外に、すでに寛永七年（1630）八尾助左衛門尉開板の「臨済録鈔」（六巻）、及び、承応三年（1654）秋田屋平左衛門板行の「臨済録夾山鈔」（十巻）があるが、共に編者を明かにし得ない。

処で、以上の諸鈔は、すべて室町以来の中世禅林に於ける本録研究の成果を集大成したものであるが、次で、黄檗隠元の渡来を境として、本録の註釈的研究は更ににわかに盛大となり、すぐれた註釈書が続々と出現するに到った。

先ず、妙心寺派より隠元下に転じ、黄檗山の開創につくした竜渓性潛は、寛文四年（1664）以来、後水尾上皇の命によって本録を講じ、このときの上皇の御筆記は、今日、東山御文庫に保存されているが、性潛は、本書以外に、所謂禅門七部書の註解を手がけて居り、刊行された「五家正宗賛抄」や、「虚堂録抄」は、今日も、禅録註解書の権威とされる。

次で、寛文十一年（1671）、東福下、丹州瑞巌寺の見叟智徹（？—1687）が「臨済録瑞巌鈔」八巻を出版し、貞享五年（1688）には、仏日鉄崖道空の「臨済録撮要鈔」五巻が出版され、元禄九年（1696）には、散木耕雲の「臨済録摘葉」八巻が出版され、同十二年（1699）には、大智実統の「増補鬆頭臨済録」が出版され、降って享保十一年（1726）、妙心寺の無著道忠が「臨済録疏瀹」五巻を編する等、本書の註釈書が続々と出現したが、右のうち鉄崖と大智は隠元下に属し、耕雲は恐らく曹洞系かと思われる。

この間、宇治の黄檗山では、鉄眼（1630—1682）等の努力による黄檗版大蔵経六千七百七十一巻の開版が完成し、黄檗山に拠る中国禅僧の来往に伴い、大陸の訓詁学の学風が日本禅林に与えた影響は極めて大きく、前述したように、臨済の正系を主張する黄檗僧等の刺激によって、日本禅僧の間に臨済禅の偉大なる宗祖義玄とその語録への関心が強く喚起されたことは否定できぬであろう。

道忠の臨済録疏瀹五巻は、右の様な時代思潮の下にあって、厳密正確な訓詁註釈による本文の理解と、日本古来の先哲が試みた参究味読の先蹤を襲ぎ、臨済精神の闡明につとめたもので、実に古今を通して、本録講読の最

高の指針たることは、何人と雖も異論がないであろう。因みに、疏瀹とは、荘子の知北遊に、その心を疏瀹し、その精神を澡雪す、とあるによる語で、「ひらき洗う」の意味である。

道忠に次で、五百年間出と自称する白隠慧鶴あり、享保十七年（1732）五十三歳にして、原町の松蔭寺に在って本録を提唱し、その嗣東嶺もまた本録を尊重したから、爾来、白隠系の参禅に本録の用いらるること緊密を加えるに至ったが、東嶺以後の人々の関心は、再び碧岩、無門関に移った如くで、本録研究にあまり見るべきものが存しない。而して、右の如き江戸中期以来の傾向を改めて、特に臨済録を重視したものは、円覚寺の釈宗演（1859—1919）で、宗演の嗣宗活は「臨済録講話」（1924）を著し、宗源が岩波文庫「臨済録」（1935）を作ったことは我々の耳目に新しいところであり、又、洪川下の鈴木大拙、宗活下の陸川堆雲両氏の本録研究は、現代のもっともすぐれた成果で、後者の「臨済及び臨済録の研究」（1951）、「臨済録詳解」（1963）の二書は、道忠の疏瀹と共に、今後長く本録の文献研究の指針となるであろう。

又、更に、以上に取り挙げたもの以外の、臨済及び臨済録に関する講義、研究、関係論文の主なものとしては次の如きものがある。

（講義）

勝峯大徹　臨済録講義
中原鄧州　臨済録提唱
足利紫山　臨済録提唱
足利紫山　臨済録（聖典講話）宝文館
高橋新吉　臨済録新講
立田英山

（研究書・解説入門）

前田利鎌　臨済・荘子、宗教的人間
伊藤古鑑　臨済（禅叢書）
鈴木大拙　臨済録の思想（大乗禅）
古田紹欽　臨済の基本思想（哲学季刊）中央公論社
伊藤古鑑　臨済録の思想
井上禅定　禅講座（春陽堂）—「禅の書臨済録」
臨済録（現代禅講座第三巻）

（論文）

柴山全慶　臨済禅の性格—臨済正宗について—
禅学研究第四十三号
篠原寿雄　臨済録の旧訓批判（一・二）禅学研究
第四十二、三号
今津洪嶽　臨済禅の教学的基盤（一—四）
柴野恭堂　臨済伝及び臨済録考異　禅学研究第四
十七号

最後に、臨済録の外国語訳は、鈴木大拙氏がその著述の中に引用して訳されたものがかなりあり、

又、Lu K'uan Yü〔Charles Luk〕氏の

CH'AN AND ZEN TEACHING（三集）

にもかなりの部分が訳されているが、なお、全訳ではない。佐々木ルース夫人の成果は、指月老師の初稿から数えるとすでに二十三年を超えて居り、その完全な出版も近い将来に約束されているが、此の仕事の完成は、恐らく国際的な臨済の禅の歴史の上に一期を劃するものと思われる。筆者の上来の覚え書きの如きも、此の仕事への参加を縁として生れたものであり、擱筆に当って、更めて深謝を新たにするものがある。

〔附記〕

馬祖百丈黄檗臨済四家録序

朝散郎尚書主客員外郎軽車都尉

賜紫金魚袋　楊　傑　撰

金鶏銜粟、出一馬駒。牛懶鞭車、磨坛成鑑。野鴨飛去、引鼻牽回。掛払遭呵、耳聾三日。不隠家醜、重説偈言。累及児孫、従令吐舌。三回賜杖、猶自未知。再捋虎鬚、老婆心切。古人雖往、公案尚存。積翠老南、従頭点検。字字審的、句句不差。諸方叢林、伝為宗要。

只有一処、未免謬訛。具眼底人、為他拈出。元豊八年十一月一日序。

我が慶安戊子（1648）仲秋に、中野五郎左衛門が梓刊した四家録の巻首に、旧本によって右のような序を附している。テクストは明かに中国で万暦丁未（1607）に出版されたものに拠っているが、この序のみは恐らく宋代に我が国に伝えられたものを用いたのであり、謂うところの四家録なるものの最初の編纂（出版）に、積翠の老南、すなわち黄竜慧南（1002—1069）が関係していたことが知られて極めて興味深い。又右の序を一見すれば、後に馬防が円覚宗演の臨済録に附した序のスタイルが、実はこの序を襲ったものであることも明かで、北宋に於ける四家録、若しくは臨済録の流伝と、士大夫の臨済禅に対する関心の一端をうかがう資料ともなる。

まえがきに断ったように、本稿は佐々木ルース夫人の英訳臨済録の解説として草したもので、すでに六年前の旧稿であるが、はからずも昨昭和四十二年十月二十四日、夫人はその仕事の完成を見ることなく俄かに逝去された。英訳の仕事は、目下も引きつづき入矢義高先生の手で補訂されつつあり、殆んど完全に近いものが出来上っているが、出版の仕事は当初の計画をかなり変更されざるを得ない。発表の遅れた本稿が、意外な記念となったことを淋しく思う次第である。

（昭和四十三年一月二十五日　附記）